江戸志 巻之壹

ル 4
1553
1

新編江戸志凡例

一凡分東西者以江城為中央東漸于葛飾南被于六郷西訖于武蔵野府中北限于豊島川口村

一佛寺神社如濫觴者一據於其旧記雑録也或社家者流及佛寺僧院傳記焉

一地名考証者雖鄙夫野人之語載之至如漏其説者猶待博覧後哲之辨

一至所引用之書者不論附會臆説議之其書而

已

一可為其據者雖野史小説暫茲其挙説

一雖府外近御所知於世古跡者摘僅載之爾

大意

凡江府の名勝を記せる書すへて五六部成へしまなき
其の一本ハ天和比俣逸老人の著書にして是球始と述き
まな元禄初年ニ著せし江戸名所記江戸雀江戸鹿子
なと江戸鹿子なとハ記せるものにして常に世に行はれ
むかしより江府神社略記を広くひろめたり江戸砂
あまねく世上ニひろまりて是を書誤りもすくなからぬへし
其後中頃諸書を并ひ録せるを名のちかき記と見へ
如稿ハ名附ならひハ名勝の古蹟よりつく人の其地の世
名所へたのみよりて吉言ありきその地の神社略記むら

さきの一本江戸砂子社寺の部にて説を挙たるのみ新たなる
書を出せるなく書肆さらしたる書の名さへも世に見えて云ふ
引ける書目なとをのせたる書なきに似せたるも多し
某氏一編を著して武江の名称をなし拾ひ得るもの少なし
校に出せる江戸名勝志を江戸砂子を抜粋しあやうく
二三箇の補ひを害して是江戸砂子をそしりあつめその
書を謂ひ或は書或説を害せる雑と云ふ それをそしれ
しを識るまじく深く知るなし さても今此編を南
向茶話求源雑記の説をとる事なく社寺称号里諺
このうえ又も旧書とともに功を驕るその南向茶話は

江戸砂子の脱漏を補ふ 求源雑記は又南向茶話にもとりて
説を補ふ予是ホを参考して其の一部を述ふることへ
遺漏あるをまさ多かるべし むかし鈴と云ふ草の
来し理の井 晨得のたきし所を拾ひての人
改め補ふこと是其の大幸ならん

引用之書目

舊事記　上宮太子　馬子
續日本記　菅野真道
三代実録　三善清行
類聚國史　菅家
扶桑略記　皇圓
一宮記　達保比　荒木田氏良
武藏風土記
和名類聚鈔　源順
伊勢物語

日本書紀　舎人親王
日本後紀　春澄善縄
文徳実録　昭宣王
神名帳
公卿補任
諸神記
元亨釈書　虎関
万葉集
八雲御抄　順徳帝

井蛙抄　清輔
名所方角鈔　宗祇
名所類字和哥　細川玄旨
勢語臆說　契沖
東鑑
参考太平記
関東治乱記
北条盛衰記
武徳編年集成
閑難笑記

更級日記　菅原孝標女
慕景集　太田道灌
万葉代匠記　契沖
勝地吐懐編
源平盛衰記
鎌倉大草紙
北条五代記
豫章記
家忠日記
本朝三国志

将軍家譜　道春
婦女傳系
諸家醫傳
諸家系圖
寛永記
高野事略　白石
北國紀行
遠遊紀行　山崎無加
木曽路記　貝原氏
東海道記　松井嘉春

本朝三国志
諸家続胤
武家名数
猿楽傳来記
和漢三才圖絵　良安
了誉上人行業記
丙辰紀行　道春
鎌倉紀行　元和代　戸田氏
駅路鈔
神社考

神社啓蒙　白井宗因

神社略記　荒井敬春　享保十二年梓

武蔵野路草　法源　元禄比

江戸雀

江戸砂子　沾涼　享保十七

江戸名勝志　南陽子　享保十八

地名箋

求涼雑記

落穂集　大道寺老人

新著聞集

諸社一覧

紫一本　佐遁老人

名所談　元禄七年梓

江戸鹿の子　松月堂不角　元禄二年

武蔵野地名考　田沢義章　享保比

詩家地名考

南向茶話　酒井忠昌

高田雲雀

旧事茗話

江戸絵図

年暦記　光廣卿ノ年暦記ニ非ス　近世ノ俗書

新見随筆　正朝之道　享保ノ比

宗祇田国記　文明十八

国花万葉記

江家次第　大江匡房

挙白集　木下長俊

都之津登　釈宗久　観應ノ比

兵家茶話　~~釈宗久　観應ノ比~~　日夏繁高

東武編年録　道春

諸社諸寺縁起

著聞異事　柳子

温故随筆　竹叢平高尚

国花風土記

珍書考　鵜飼信興　元禄ノ比

可成談　徂徠先生

風土記残篇第一　平祖衡　正徳ノ比

政談　徂徠先生

秋の寝覚　長伯

大系図　公定朝臣

同舊記

政事要略　惟光元亮
犬追物記　林春斎　正保ノ比
関東古戦記　鵜島氏
螢雪新話　紀晋子
寺社拾遺
鎌倉志　水戸
神名憑談　多田義俊
雑話筆記　白蛇子
萬葉考
鎌倉九代記

新編江戸志巻之一目録

一 御曲輪内　東西南北
一 城東　日本橋辺　江戸橋筋東北　同南東
　　日本橋南筋　京橋角筋
一 城南　櫻田辺　霞ヶ関辺
　　永田馬場辺
一 城西　糀町辺　番丁辺
一 城北　飯田町辺　小川丁辺
一 城艮　参河町辺　神田辺
　　駿河臺辺

新編江戸志巻之一

東武 懐山子 輯著
塵積 校正

武蔵國

按ずるに當國を武さしの國と名付るゆゑは日本武尊秩武の嶺に兵具を納め給ふより武具をさし玉の儀をもてむさしといふよし大和本紀の説に依て多くはいふといへども諸國花万葉記國名風土記神社略記等の説皆異る温故随筆等にむさしの名付たるさしとは道といふ古語なり當國に六つの道あり故にむさしといふ成なり今童子のよみならふ十六むさしといへるも道をゆくにこゝ諸有りと又加茂真淵の説にむさしといへるはむさし

又異訓之古語むさとハ人の集る所をいふ當國ハ古へより人
多く住ぬ國なりされハ高麗の人抔多くおちくるを高麗
郡といふ所に置き むさの宿所 筑紫もむさといふ所有と說
ハ人多く住むをおほきしゆへ人多の所なり 上の國をむさのかみと
いふ是をさのみの國に後なり むの字を上略せしなりその志も
の國をむさしもといふ是ハもの字を下略して むさしといへる那り
西國を上下といへる例ハ西國を前後とわけたる筑前筑後肥
前肥後豐前豐後那り中國ハ國を前中後と國を三つわけし
わけたる備前備中備後越前越中越後等那り東國ハ上下
に上總下總上野下野なりされハむさ上むさ下と二つにわけたりし

まさに見えたり

舊事記曰无邪志國造志賀高穴穂朝世出雲臣祖名二井
之宇迦諸忍之神狹命十世孫兄多毛比命定賜國造

日本書紀曰廣國押武金日天皇元年十二月武藏國造笠
原直使主與同族小杵相爭國造經年難決

續日本紀曰日本根子高瑞淨足天皇養老元年二七月庚子
武藏國守正四位下多治比眞人縣守管相模上野下野三國

和名類聚鈔曰武藏國 國府在多摩郡 行程上廿九日下十二日 管二十一
今按、二十二郡那り和名鈔ハ葛飾郡なし この時ハ下總国

の郡の内なり後に武蔵國の郡に入られ二十二郡となれり又
國号を二字に定られて武蔵と書するは凡國郡郷村等用
二字用好字元明天皇和銅六年被作諸國風土記時事也
と旧記に見ゆ　去のみに今傳ふる所の武蔵風土記といふは偽書なりと
てむかしの風土記に似られ委しくは平祖衡の風土記残篇等
に見ゆ　予考ふるに是より偽書といへる久しく世に行はるゝ
書にて当國の事何代の旧記によりて書せしにや見ゆるなし又
拾へるも行はれざれど此書も風土記の説を多く引たるは
を信用して引證となしたるは行はれ居る人も流行するなし

江戸

豊嶋郡　峡田領　武荘土

風土記曰　公穀五百九十二束　三字田　假粟三百二十七丸　三毛田

貢ニ馬牛瀕萩阿無見浜与伊等充左馬寮浜蔵庫司
南向茶話に江戸の号は江を望める意成べし　柳営
御城天正年中御入國以前今の雉子橋の外より北の方大沼にて
西の方まで木坂下掘て入江となし有しよし小川町も竜閑年中
外御曲輪なきに以前は牛込よりの流船河原橋の向へまで
木坂の方へ流をなし又小石川の流を今の三崎稲荷の辺をさし
二つ将の川へ流てぞありし　是によりて江戸の号は行はれしと云
梅も江戸の号は往古よりあるし旧記にも荘土と出たるは
むかしは荘の多き大地ゆへかく名付侍りしにやきゝへ

荏原郡あふへ名なり　何さへ荏土の名據何事もいふべし

江府御城

紫宸本云柳営御城とかい太田備中守持資入道して道灌
と号し武州荏原郡[redacted]品川の館にありしが夢想の告ありて豊島
郡此江戸の地千代田宝田祝の里といふ所をもつて城を取り康正
二丙子年より初めて長禄元丁丑年四月八日に功匠成就する也
江亭記曰関左形勝之雄以武為冠武者大国也其山水奇
傑而兼要衝者江戸其武之冠乎距相府連慎可百里脊
緑蕪白砂並海以北王等之山羅帯之水致渉忘勧而不覚
日之将暮也翠壁丹崖屹然以高時珍卉佳木蔚然而中

秀邁左金吾公源太夫之所築新城也攀以蹄焉俯而以臨
焉四面平絶直下百大東南佳山水歴々以在挟履下南顧
則品川之流滔々漾々以深碧人家鱗差乎北南而自
檜紅楼鶴如並翬如飛以翼然乎其中東武之一都会有
一楊一益二之亜指也東望則平川縹緲今長堤綫廻水石
塊偉兮佳気欝苓謂之浅草濱白花大士遊化之場巨殿寶
坊輪奐以掩映乎數里瀛補洛妙境神人所幼云其後則
滄洲茫乎百川与海會呉楚東南所乾坤日夜浮即此
乎其前則呑岩出没而原野芥蒼天整之幾多仮実乎関
則百萬不可以道也乃知此地面勢実一方金湯之最而無所

其ハ二也　下略
家忠日記曰天正十八年庚寅八月大朔日武州江戸城ニ移給フ
是ヲ俗ニ関東御入国ト云　江戸城ハ遠山左衛門佐景政カ居城也
景政ハ北条ニ属シテ小田原城ニアリ　其弟川村兵部大輔ヲシテ江戸城
ヲ守ラシム　遠山丹波守　景政嫡　真田隠岐守ト二人志ヲ御当家ニ通シ
江戸城ヘ移リ給フ案内者トシテ　台師ニ先立テ江戸城ニ来リ川
村兵部大輔及ヒ景政カ従卒ヲ江戸城ヨリ出シテ　渡御ヲナシ奉ル　此功ニ
依テ遠山丹波守　真田隠岐守ニ各五十石ヲ加賜フト
始ハ江戸御城ニテ実　鎌倉九代記本朝通紀山庵折本
其外諸書ニ記シトハ入ラス　此際の一本ニ　江戸名跡を記せる書の中

ここに古書ゆへ志むらし　この説をあくたまとより御城御入國ま
で代々の傳記諸録にはらいへりし　略之本文ヨリ書肝の江亭
記ハ文明八年丙申八月相山暮樵得の作にして　太田道灌ハ
此處の記中ハ略して是を出ける　鎌倉大草紙にも長禄
元年四月太田左衛門大夫武州江戸城を取立トあり

御曲輪内東

○大手　○大下馬

○和田倉　龍ノ口の所

○馬場先御門

紫一本ニ云　むかしハ不明御門といふ　今ハ往来自由なりし馬場先御門といふよし記ス　御門内ニ馬場有りゆへ名とされ

○八代洲河岸　和田倉より馬場先の御堀まてをいふ

落穂集ニ御入國の時分まてハ此所猟師町なりしよしを記ス　紫一本ニ云　むかしヤヨウスといふ異國人ニ此所を屋敷として賜りしよりの名なりといふ

慶長記ニ曰慶長十九甲寅年九月朔日阿蘭陀人来る耶楊子虎
の子二疋を献すとある也
江戸方角安見図にいはく長禄年中太田道灌江城を築き
其時諸家之居所城外の町割をせし時則扇
を岐きたる如く町割なれハ末廣繁昌を祝せし先兆也
彼諸家之か居する跡を今称するにはあらしといへり此説信
用しかたし耶楊子か屋しきをとりて以前やよすかしの
号古書に見当らす耶楊子か屋しきをとりしハ慶長十
八年十月その事ありと武徳編年集成に見ゆ耶楊
子ハ吉利支丹御制禁の国の忠をなせし中出する蛮夷なり

按に江戸方角安見図の説無説ハ取可し
○大名小路　やよすかしの旧跡をいふ
○龍の口
地名考に曰御堀吐水の川也南郭詩龍ノ口溝横紫柏流
と有り
江戸砂子に云むかしハ神田村より出る里人此所に平田大明神を祭
りある村の鎮守なりし近年稲荷社と崇められしとなり
○道三河岸　諸家御医道三老せし故今大路道三のやしきなり
慶長記ハ柳町と云傾城町也天正年中京都萬里小路柳の
馬場に原三郎へと云者傾城町を取立柳町と名付此所也

かの京都の遊女町の名をかりて柳町と名付るとなり

○道三橋　今大路家の宅地のありし故名付く

諸家医伝に曰く元祖道三号一渓洛陽人永正四年九月十八日生于京師柳原ニ其子玄朔延寿院道三法眼天正十六年太閤賜於城州五百石寛永五年十二月十日於江戸死八十三と云り

古此道三或時代の橋の時少しおそろしきは所との免許ありて御堀をほりたる所故とかやありしは則橋をかけさせられしと

なり

○貞雄云私にいはく此道三橋を延宝八年表紙屋市郎兵衛開板の江戸安見図に高橋と書り亦寛文十年□近道

下方関も同様なり

○銭瓶橋　常盤橋と呉服橋との間をいふ

江戸砂子に云むかし橋をかけし時銭の入たる壺を掘り出したる故の名なりと云　上古此橋所は大木の橋二本ほりしとぞ

貞雄云　江戸砂子に一説むかしは橋の辺にて永楽を引替たりし故銭替ともいひしと申す　予聞伝へしは銭を商ふ者此所に集り居たりし故の名なりと云りさるは銭替えしなり　四層に此銭かめ橋と云しは疑ひなし　四層年中中川喜雲云しは宗因の句に銭かめはしを玉夢かけと云句何れ指隠て女の曲物かて出たるは何方の所へもて切手ありては出さるとせしの

下なる舩を出せしを切手かくしぬ事出ずる事の意也扱ハ于此銭買
ましと云しハ訛也人

○常盤橋　本町へ出る所　古ハ是を大もしろふとし寛永の江戸絵図にあり

江戸砂子ニ云常盤ハ松の縁をとり松葉の仕了ゆきを以て名付られしと也　梅か或人のいふし此説非也此橋五代記常州の士
根岸兎角と岩間小熊敵術仕合江戸常盤橋上ニて勝負ありとあるハ　御入国前北条持城の名所ならざるを知ぬ可し

貞雄云　如斯書れしを見れハ北条五代記ニハ文禄二年九月彼仕合大橋の上ニて有り

○呉服橋　こふく町へ出る所つなり　寛永江戸図ニハ後藤橋と有り

地名考曰　祖徠詩憶得呉門楽と出す

○鍛冶橋　かち町へいづる　みつけ一名かれ

同　南

○桔梗御門　大手の南

或説ニ云寛永元年御上洛の時御帰京し祝儀を表せし桔梗御門を立られしよし

貞雄云　小野高尚所持し江戸古絵図ニハ此御門吉慶御門と記し在也

○坂下御門　桔梗御門の南　江戸古絵図ニ是を山下門と有り　増補

○櫻田御門　西の御丸下

落穂集に云、國の節ハ外櫻田御門の事なり、大方ハ廊の亦戸
つ立て名をハ當田東門といふよし記を
或記にハ櫻田ハむかしの村の名にて木の物語にも
其辺の昔の様陰く櫻田を苗代なとに見えたりとかや

○日比谷御門

往古ハ日比谷村といふなり　北条分限帳にも日比谷村

○数寄屋橋御門　すきや町へ出る御門なり

同　西

○半蔵御門　本名かうじ町口御門

旧事茗談にいふ、むかし此所に服部半蔵正成の組中ありしより名付しとそ、其の正成ハ文政石見守正種といふ正
成をつけたれ鬼半蔵とて武勇の誉ありし、元禄二年の
江戸図鑑にハ此御門を内を麹穴と書て
貞柱に云、今の紀州様麹町御門を麹穴御門と云し、是
大猷公の御代の事也、其比の図に記せり、亦いつく亨
桜田より半蔵組やしきの事にて柴の一本とかく記し
侍ることは半蔵まうたの旦しきより寛永の古絵図をみん
とし半蔵御門の内外服の側て服部半蔵の屋しき有

きく並て半蔵御門とゆへなるよし

○半蔵山

井伊家の中屋しきを言 是ハ彼服部半蔵殿の組屋しきの
ありへのよしハ江戸砂子ニ見ゆ

貞様おもて此説紫にし一本ヲも見ゆれとも疑をし 今井
伊家の上屋しき中屋しき共ニ御入国以来加藤肥後守
清正ニ被下候処寛永九年七月十二日右屋しき二度ニ
井伊直孝ニ下しかし余ハ此所ニ成まして肥後守拝領以前
若しくは節しる内半蔵組屋しきの所なるよし

○辨慶坂

井伊家上屋しきの前の御堀を云

落穂集ニ云 東西諸名将まみの御堀普請ニよりて依て西東
の武者坊と中心ヲて弁慶堀といひならはしたりしを記す
江戸砂子ニ辨慶小左エ門か堀故の名なりとも

同　北

○梅林御門　平河ノ内

落穂集ニ往古は此所梅の林ゆへに名付るよしを記す

○梅林坂　同所

文明年中太田道灌川越ニ菅原天神を勧請しける時さき
並木ニ梅樹を数多植られしより梅林坂といふよしを江戸砂子ニ記す

○榊原小路　竹橋之上

紫の一本ニ云むかしハ木立にて　榊原ありて其木を伐りて結
構黄門公の御屋敷とす　是を木立の御屋敷といひしを
記れ江戸砂子ニ見へかくあり

○平河口御門

紫一本ニ云むかし此辺に本所法恩寺平河山浄土寺　聊とあり
これによりて山号を平河山とよふよし

○竹橋

旧事茗話ニ云　御入國の比竹をならへて渡せしよりの名なり
と紫の一本にもおなし記し

○北桔（ハネ）橋　竹橋の内

○御鷹部屋　同所

○紀伊國坂　竹橋御門つゝき上り小坂
むかし此辺ニ尾張紀伊の御館ありし故名付

○代官町　田安御門つゝき
貞享之比此代官町に故御花畑ありて天和四年二月十二日代官町
御花畑奉行嶋弥太郎へ御普請奉行を仰付
出来之後同年十一月廿一日ニ御家へ御褒美被下此段御目
記之へたり

○馬場　同所

貞観の頃朝鮮人来朝し節曲馬上覧有し故に朝
鮮馬場といふ

○田安御門　此御堀端に牛ヶ淵といふ所有

紫の一本に云ふものゝ代官町御門の事なりこの御門の堀の内上より
東を見渡せば駿河臺を初て下町諸々れ本所より打つゞき上総山ま
で見ゆる

南向座諸と云ふ往古田安明神此所に鎮座有て今築土へ
遷座あり神木の榎牛込御門の内に今残りしものなりといふ

貞観の頃古へ田安御門の辺田安の臺と云ひ牛込御門の内の
辺を下田安と申すよし中田安大明神社跡の旧地なり

今は堀伊予守政方の屋しきと石河土佐守政武の屋しき堺
にありといふ

紫の一本に云此臺は田安大明神の社昔は有りと云ふなるは
上古田安の臺にありし故下田安へ移されたるなるべし

○清水御門　雉子橋の北

或源雑記に云往古この辺より清き水涌出せしとて御門の名
とはなりしよし古老のいひ伝へなりといふ

○扇稲荷社　清水御門の内土手別当桜本清光院

旧支配諸て不寛永比天樹院様御勧請有り神体は扇子
なりといふ

○雉子橋　一つばしの西

むかしそのあたりに唐人来府に節御馳走に下されし雉子を畜ひ入置きし所ゆへに雉子橋といふよし

貞柱が云、此筆 江戸砂子にも見へず 寛永年中の江戸古図には今の雉子橋を一つばしと書て

○一ツ橋

紫の一本に御入国の時分は大なる丸木の一つ橋をかけしよりその名をいふ也 寛永の古絵図には此所を雉子橋と書り

或説に むかし松平隠岐守殿屋しきありしゆへなり 故伊豆ましといへり 天和江戸絵図には一つ橋とあり御入国よりの名なるべきか 中古かくはいふまじきこと

予此書を編せしおりの草稿にはまへにある人の見せし予が筆をかり数しく書て正しからざりし故此書には説をなく或説に云と書しは此人の説なり 然るに此所をもしを伊豆橋といふの説天和江戸絵図によりていふ説なるべしといふのし 寛文の江戸図に一つ橋とあり そこのみならず紫の一本に寛文の書なる書なりといへども一つ橋と何ぞは むかしより一つ橋といひし事明らかなりの世をさへてつまびらか人なるべくもしくはなるべし

貞柱云 故つまり一つ橋といひしに疑ひなし 予延宝八年の江戸

戸の圖を所持されし此圖を見しに今の民部卿治済卿の御屋
しき松平伊豆守屋敷なり同じ一つ橋を二ヶ所に伊豆守殿と
もなしと見へたり予所持の天和二年江戸圖には一つ橋と有り

往古は大炊橋と称す故土井大炊頭宅有由と落穂集に見ゆ

○神田橋

江戸城をいふは此所神田明神の旧地なり故也むかしは芝崎
村と云ふ里なりとぞ又或老人の云田沼屋しきの内神田社の
旧地なり社は東向なり今も神田祭礼この田沼屋敷におゐて神輿
しばらく留るといへり

橋は御郭内の中にては奇にして志んきさもあまたありし一つ二つ
字を付るに記すなる所しるきなれ書る記にはなんまそも

こよりて最叙べし

城東

○一石橋

むかしは大橋といひし此橋の南に呉服橋後藤北に金座後
藤有けり後藤五斗しとかけて一石橋と名よし江戸
城より御堀下の方は北さや町本両替町本石町本白
銀町神田堀あり橋をわたりて南の方は西河岸町呉服町
元大工町さきや町元四日市町上槙町廣小路南槙町
同大工町かぢ町五郎兵衛町小さんや町狐沼橋也

此川筋御曲輪堀の河岸通りより一石橋日本橋なとの次ハ
江戸橋なり此の川下ハ鎧の渡し夫より湊橋永代
橋なり

○日本橋　長凡二十八間

深草元政ハ身延紀行に江戸へ至りての詩に日本橋辺日本
秋と作り大東詩家地名考にも南郭か詩に日本之東日本橋
と作れるハ此元政の詩を證し之此日本橋を江府の中央として
諸方への道程を定む室町一丁目の西側を尼店と云ふ尼崎屋
又左衛門拝領の地なりしゆへ尼ケ崎町といひしよし
西側ハ品川丁駿河町本町二丁目本石町二丁目本銀丁
二丁目迄東より神田堀なり東側ハ本船丁安針丁小田原丁
瀬戸物丁浮世小路本町三丁目銀丁二丁目也

○室町

薬種屋ハ本町三丁目本橋尼店なと此辺の薬家にて中にも地子（燈心売六十弐人毎日小田原丁瀬戸物丁の辺にて商ひ行者か地代を出さるよし端午観音市仕も是とおなし）
きゝ及よ行ハ弾左衛門とか穢多頭の家宅居是なりし二つの三つの
へ流ハの大木なりとも蓬生茂り一構の穢多おほ行しを浅草
の後なる今の新町とふ所へ引移りしたるよしを記せり

○十間店

本町石町との間を云ふ毎年も海寸羽子板雛の市かぶと
まどの市立て繁華の所なり

○白旗稲荷社　銀町壱丁目　別当大聖院　三宝院流

是ハ本町壱丁目銀町の辺往古ハ福田村といふ里のよしその時の鎮守の社なりし　和銅四年より鎮坐と云し

○安針町

此所往昔ハ安針町ハもと西洋のものにて元和年中ヤヨウスといふものと同船にて来朝し後日本に留り三浦安針と名を改め則当町を賜ふ故に安針町と云　往古増上寺此辺にありし

○時の鐘　石町三丁目北側新道にあり

江戸始りと云此鐘ハ御城内より下りしと云　数度の回禄にて鐘の声悪しく成しかバ先年椎名伊豫守是を鋳直す　黄鐘調

至て長久の声なりと

按ずるに或人の云此説非也回禄の度し焼たる鐘を用ひ候鐘撞出来ざれバ新に鐘を鋳事なり来り焼たる鐘と引替事なり

右此鐘をハ引かしと時に是を見し人作りしと茲種々ありしハ

御城内にて時の鐘を撞せられしが御太鼓に改められし故鐘を召預られし者の為めとして石町へ撞鐘をたて新たに鐘を鋳させつかせらる也

御城内の鐘ハ今に伝へ置せらるゝと也　また或老人のいへらく此の御城内にある鐘ハむかし三州より御陣鐘なり

御入国之後　御城にて打のならしけると也

御本丸の鐘　御櫓

貞雄云　御城内の此鐘ハ今ハ西ノ丸の太鼓櫓の側にあり
むかしハ本丸にありたる中を半分ハ打て捨りて語る人
ありし又いはく石町の鐘ハ何かあれと鋳直し鐘と更へり
今の鐘ハ田藤の後宝永八年に鋳立をきたし鐘と也し語る
人あり又いはく石町の鐘ハ何方にて鋳替し鐘と更へり
今の鐘ハ田藤の後宝永八年に鋳立をきたし鐘人と語る人
ここの世に尋ねしに彼の話とたかひたれ銘左のごとし
寛永辛卯四月中浣　鋳物師　大工椎名伊豫藤原
重休名をかへ　宝永七年十二月十九日執行ありし

小柳町喜田伊豆守中屋しきより出火して石町旧焼亡之節
此鐘焼失せし故其翌年宝永八年鋳立をきたしと見ゆ

○鉄炮町

当町之名主勝宗八郎と云ふ江戸より鉄炮工師
神谷の名付けしに名主となりし此由むかし多田おとよはし
御鉄炮張の住居故に当町の名となれ

○小傳馬町

往古此辺ハ六本木と云馬継の宿ありと云ひ伝ふ

○囚獄　小傳馬町

江戸御府内御国の御仕置之大罪人株等の此の徒者を

捕へこの木の下にれのる石出帯刀といふ強勢の士へ預けやらせられし
ことありその御役儀となりしよし
松を石出氏は平姓にして多賀谷の後胤なり元祖石出日向守
とて下総の家のよし 諸家系図に見ゆ 多賀谷の流故にや
以て九曜の星を附来れり

○薬師堂前　小伝馬上町

むかし法華宗光院この所に在本所猿江に移て今は

○多代田稲荷社　小伝馬上町　別当　教光院　三宝院派

諏訪明神社　江戸神田と云ふ

むかしは恵の家の地にありしが後に宮部氏の地に勧請するよし

或人云此説非なり多代田稲荷元の地社は今常盤橋の内北
奉行所のその向に有ていふ事也むかしは多代田おいて
今の小伝馬町は其の替地にて稲荷も別に勧請せしといふこの事
大伝馬の名主馬込勘解由か家の日記に有と云し

○橋本町

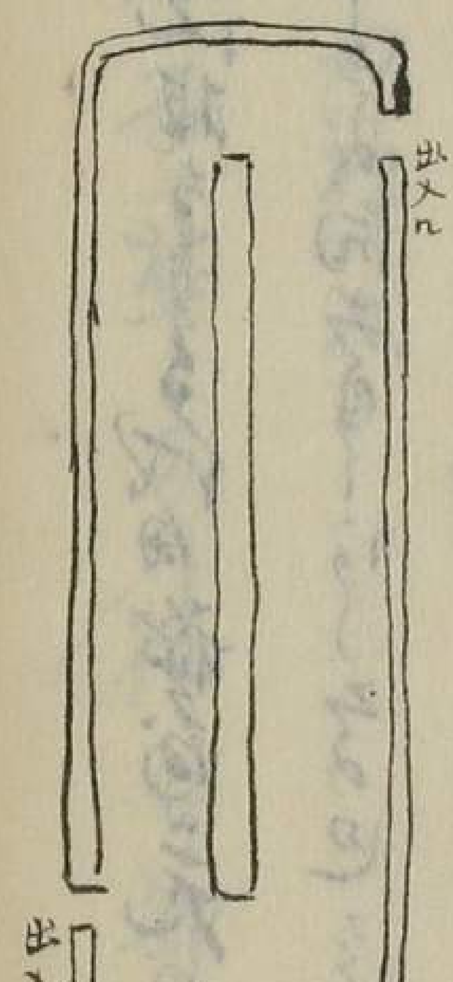
此辺天和比まては寺地にて駒込の行寺深川法禅寺本拠て寺
深川要光院本所弥勒寺なとも此辺に有り

○馬場　馬喰町北の裏に有り

昔の一本と云はは町の名主をうつ来源く前富田半七を則ち
御博労人と云しむかし実方の上御陣の時御馬揃ありし所の

よしさて朝鮮人の馬かたも度し此馬場より橋へとおし
笑ひきる事かしこし

貞享云此馬場ハ追回し馬場と云し子細ハ土手の築方
此図のことし中の土手を廻りて並ありけるなり同し追回しと
云ふ我も江戸図を見しにけり是も明暦大火の後ハ馬場一所
なりし也 戦国の馬場追回しとて築事ありし出陣
の時の勢揃で大将見物の時に中の土手を隔て家囲れ於
大将押し旅立を見送る事なしとこそ



○門跡の井 横山町三丁目南側町屋の裏にあり

むかし此所に西本願寺の跡ありし時の井なりとてうち華地と
称せしとよし

貞享云 西本願寺浜町より木挽町の築地に移されしハ
明暦三年酉正月十九日焼失して築地へ移りけり
御日記に云明暦三年丁酉五月三日今迄の寺地御用地に召上
られ替地木挽町築地にて百間四方の地下されしと云是に
今の西本願寺の地なり

○矢の御蔵跡

矢の御蔵ハ天和の江戸図にも見へたり今の此山伏井戸の道より肩

澤町の北川を堺として北ハ両国の廣小路元柳なし也横山町同朋町まで一円の御蔵也元禄の比ハ御蔵ハ間部屋家屋敷と成し故ニ今も両国橋より新大橋までの河岸を間部河岸といへりしときも替りし四五家のやしきもあり

貞抱云 矢の御蔵ハ今田沼家のやしきより北の方なり間部河岸とおなじ之両国橋より新大橋迄の河岸をいふ也となし

○薬研堀　矢の御蔵の船入堀の跡なり明王院と号す庵と不動有り

○難波橋　米澤町三丁目又薬研堀大川より入口にて同名の橋有り

○夫婦柳　難波橋の辺ニあり

○山伏井戸　吉川町

往来の道の中ニあり中比水かれたるを山伏のいのりによりてもとのごとく冷水となりしよし

○浅草橋　神田川ニかゝりて此所の御門を浅草見付といふ

○柳橋　浅草橋の下大川へ出る所也

地名考ニ云 揚柳橋と書し是ハ新柳橋なり旧柳橋と云ハ薬研堀の下ニあり此所ニハ土手かし渡し船かゝりしなり天和江戸図ニ見え此辺植木たえとあり

○西國橋　長九十六間

寛文江戸圖ニ大橋なし　万治二年ニ始めてかゝる大川
を武蔵下総の堺とせしより此名有り
大東詩家地名考ニ　徂徠詩　両國橋邊動櫂歌とあり

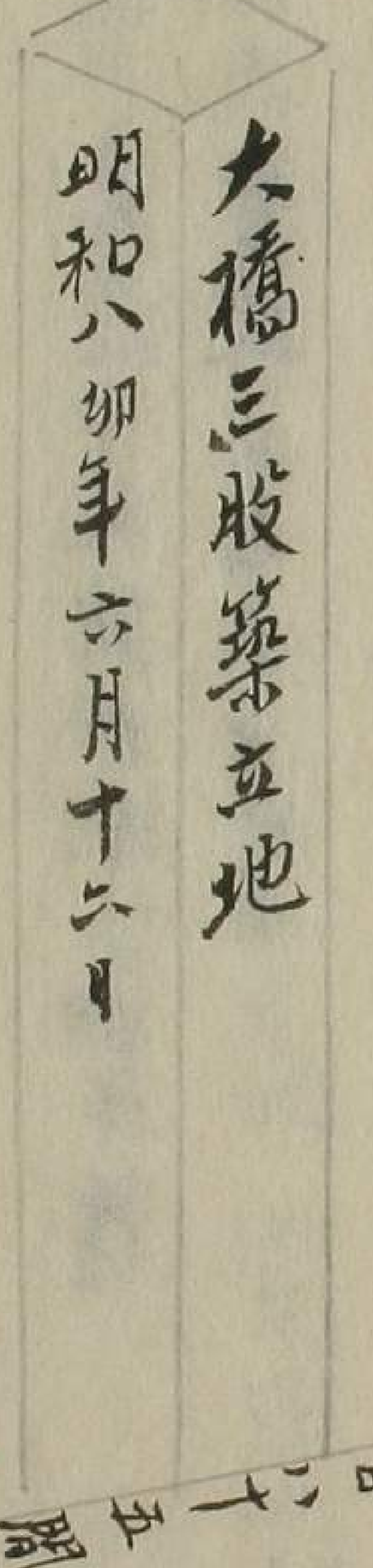
○新大橋　九長百間余　両國橋の下

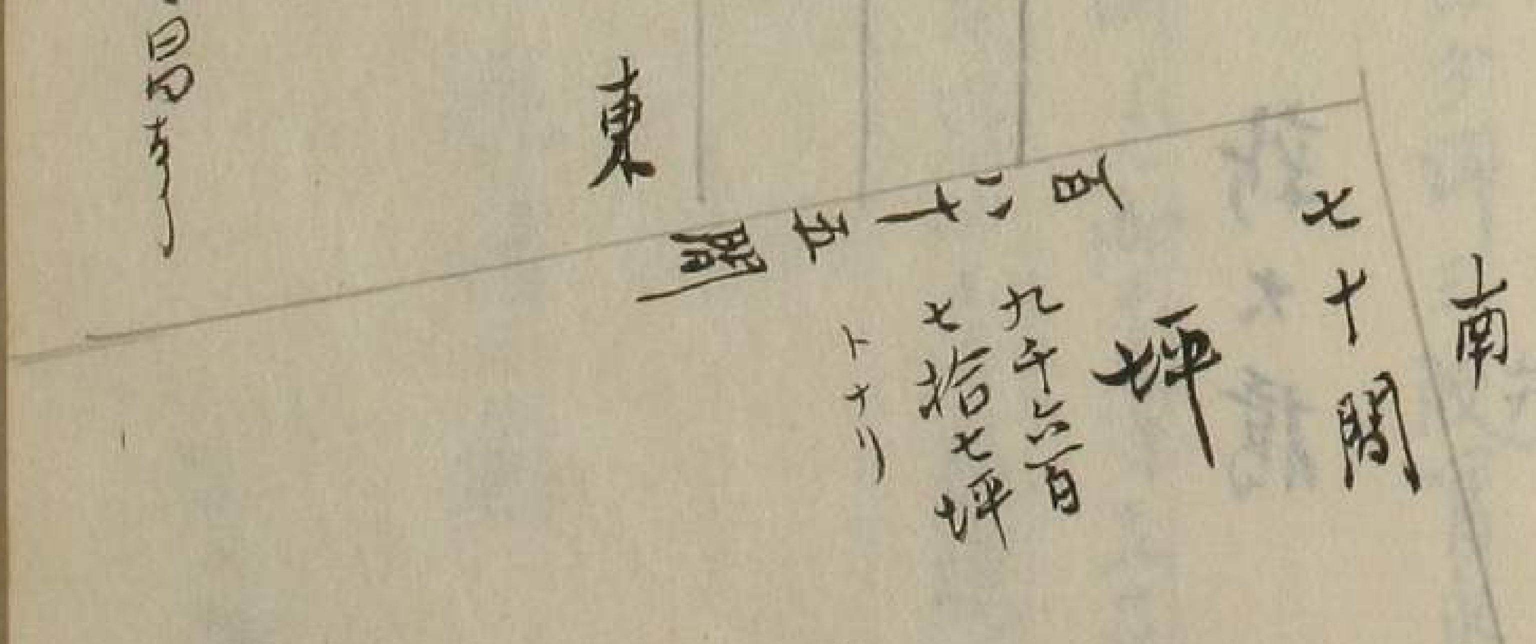
元禄六年初てかゝる東都巾川記ニ大橋とあり　永代両國
此橋と併せて三ツ橋と云ふとあり

○三派　新大橋下

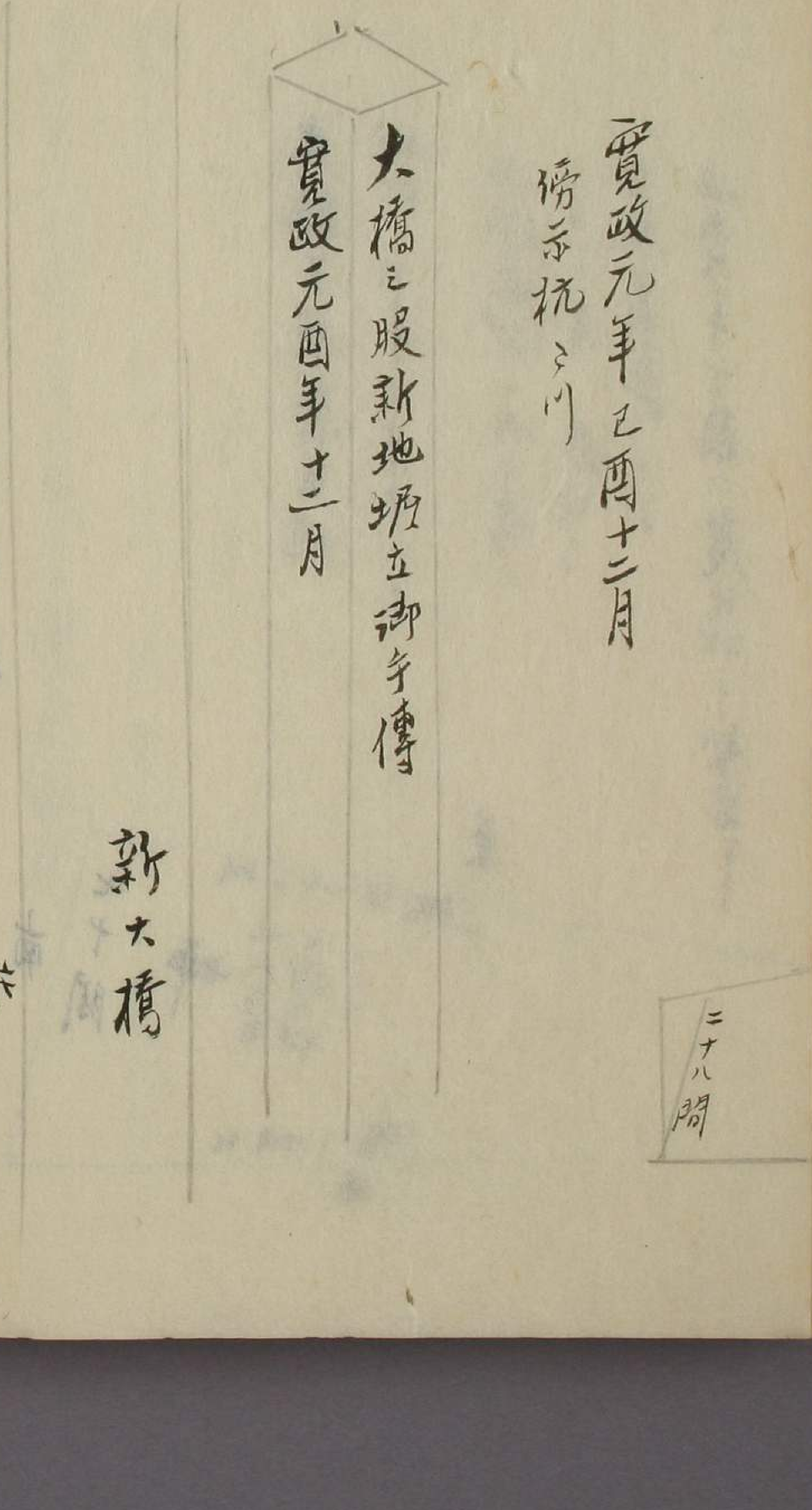
地名考ニ三叉又三ツ叉　三流とも用　南郭詩ニ曰　落漲統三派
連なり此所も月の名所にて絶景の地なり
貞柱云　三派あれの中之比より築出しの新地なり　今は崩れ
多く解花の地なり浮世に及びていはゆる人の三派の地形を
古き人に奉ニきくと新古の圖を追補せん

明和八年辛卯六月十六日榜示杭





御船蔵前の出を後て
ここを築し名付て
三又富永町といふ
安永六年丁酉の度これより繁昌す



明和八卯年より寛政元年酉まで十九年の間なり 星成年三月の比
ましこ元のめく大川なる

安永元壬辰年馬込勘解由願之三股新地築立御用懸御目付河野吉十郎安嗣〇九千六百七拾七坪六分歸三股富永町茶屋九十三軒建

寛政元己酉年冬大河浚ニ付如元埣之河トナル御手傳立花左近将監阿部伊勢守秋元但馬守被 御付候此土ヲ仮橋ヲ掛ケ深川江運ニ靈雲院其外江置候由

加賀見遠清之圖

江戸橋筋　東北

○江戸橋　日本橋より二丁ほど東
橋をわたりて南の方ハ四日市廣小路あり橋より下の方北ハ伊
勢町あり

○荒和布橋　本船町より小舟町へ渡す橋也一名六助ともいふ
江府のあらめ多く是より出るそのむかし海草類をあきなひし
積おきし商ひ夏をとはずして多く是より出しと

○照降町　小舟町の横通りなり
雪駄をも下駄をも商ふ店多き故に俗に名付しよし本
名ハ小舟町横町堀江町横町なり

○思案橋　小あみ町一丁目二丁目の側

むかし此辺に遊里のありし時客此の遊人この橋まではず
みて遊里やよからん茶屋やかへらんと思案せしより名付る
よし俗説なり

○態暮橋　小あみ町より甚左エ門町へ渡る於やかたの際

俗に云むかし吉原此辺に有し時思案橋まてきたりし思ひも
かりてよしはらへ足をむけたるを起こして此道へかかりし所なりと云伝
へたりしと　江戸鹿の子に見ゆ　揺揺橋とも書し

○稲荷堀　小あみ町のうら通り土俗とうかん堀と云ふよし

○稲荷社　とうかん堀の側にあり

○杉森稲荷社　新材木町に　神主　小針河内

神社略記に曰昔此所に杉森の森とて少しの森ありしが数度の
火災にて跡なく成し今の此社の旧跡なり祭礼は四月十日と出たり
いつの比よりかの礼有しか年も神社略記に見へず

自在云或人のいはく昔此所に小針孫左エ門と云町人居住しけるに
此屋敷内にありし稲荷の祠は延宝七年五月廿七日火災にて
此辺不残類焼せしに此祠のみ残りし諸人是を奇とし信仰す
川向某とか云人信仰して新たに姪子の姫を神と相殿に稲荷
に祠り孫左エ門なき後杉の木を少し残りて田神職小針山田
継て此名字を譲り受け小網町の地の裏に住し人の家請

すべき道もなかりしに元禄十六年本多弾正少弼忠晴寺社奉
行の時社へ道を出されしとなん

○花町　本名弥兵衛町

此町ハむかし西本願寺横山町に有りし時樒(しきみ)屋ありて立花の花屋
多く住けしより名あり明暦の大火災後本願寺ハ本挽町の築地
へ移りて名のみ残れり

○伽羅稲荷社　大坂町

○三十郎稲荷社　長谷川町

○富澤町

旅籠集り諸国の徒　澤といふものに遊女町の遊所に移しきし

町四方の遊女を集め丈を勤め元を葺屋町と名づけ
比まりしを記せり

○元吉原

高砂町　和泉町　住吉町　難波町　方二町の所なり

河岸の小路ハ其時曲輪の外堀にて大つ通りといふハ其の時の
大門口也といふ　江戸桜にも見ゆ

是ハ追而寛永年中迄ハ遊郭と定りたる頃堺町なし

此新町ハ所かハりて今新吉原へ移りてのちハ麹町八丁目に記録云

河岸の内大橋の内柳町々三ヶ所也此大橋といふハ今の常盤橋の

事也柳町ハ今の常盤橋御門道三河岸の柳有りて柳町と云ふ

六麹町に傾城屋拾四五軒、鎌倉河岸同じく柳町に
二拾軒程、又は京都万里小路柳の馬場と云所に傾
城町ありしを原三郎左衛門と云ふもの天正年中願ひて柳
丁に移せり。因て同く柳町と云ならへり。夫より其所へ駿府弥勒丁杯
より引移り、猶町の二条新六条の傾城町を引移り、その伏見
夷町・奈良木辻等所々追て江戸に移りし、慶長年の比柳
町の地面召上られ候半の傾城町今北と称す新寺前に引越し、
此比傾城屋をお歩おいて傾城町場所取立度よし願ひ
九ヶ年も御免願申入処、庄司甚右衛門と云者頼めて願ひ出
いは駿府大坂其外諸国の津湊共にて繁昌の所々は先祖より

御免に傾城町然して二十四ヶ所在て所々地日増に繁昌那りまし
足まいり、傾城町ありて所々分散いたし所の為に悪しく、三ヶ条
を以て願出まし、三ヶ条左のとおり

一 遊女を買遊び候者、於其好色に耽り身の分限を不弁家職
疎忽に不勤、傾城屋に入込長居仕候ても、傾城屋に儀へ申者の
方より金銀多分に貪奪取留置馳走仕、然る所おのづ
から主人親方へ奉公を欠ヶ、剰へ引負損致し候ハヽ、傾
城屋にも金銀を限りに致させ留置ならず、其ヶ所に場
所定め候て、只今迄有来候所々傾城屋共を一ヶ所に集め吟味
仕、自今一日一夜の外長留為致間敷事

一人を勾引候者之儀前々より堅御制禁之處今以相止不申
當地近在ニ而も猶右人を勾引候様不届者有之ニ付子細を承
候處困窮ニ者の娘共養子と名付貰受成ニ而遊女奉
公又ハ遊女屋へ奉公ニ出し大分の金銀ヲ取右渡世ニ仕候様の不届
者有之候由ニ而其時ハ娘共ニ而も人宛も養子ニ仕十四歳
も罷成候へハ女ニ而も奉公ニ出し度其の父母方々中次引
取出へ右様之偽を申或ハ金銀を出し候と掠め実父母も不思案へ
又ハ遠国抔へ連越候故色々自由ニ仕候ニ付抔へ売出し大分の
金銀を取申候ニ付様成不届者ハ人を勾引候も一同ニ付様ニ而有之
以来右躰之者を改ニ而存勾引其養子を相對も仕候ニ付奉公為致

然者有之候ニ付及露顕候ハヽ候躰町ニ而召付一所ニ罷集り候ても
勾引者ハ勿論申ニ不及養子娘の親迄も吟味仕左様成者を
奉公ニ出候ハヽ急度可申付事

一近年世上静謐ニ而候処濃州浪人騒動之節之事も穏ニ而候
自然遠國を何ニ悪事を相企候ニ付諸浪人の類ニ一同ニ而ハ
右様ニ而悪党の類ハ人目を忍ひ候所ニも相定め候
浪人ハ一所ニ住居ニ抱女共の傍ハ金銀ニ而も出所吟味仕
候ハヽ世上困窮ニ而留置申候ニ付右之旗本之家遊女屋抔ニ
居住候ても難計ニ付其外方ニ而ハ不届仕出候者欠落抔ニ而も
分ニ住居ニ遊女屋ニ請合候所ハ其体ニ而も所々の遊女屋ニ

かゝり候儀ニ縦令何様之者より申出候共又ハ
号抔ニ而も紛敷通り候而御惣触有之者ニ
出候儀は堅無之急度相守可申候事
右之通ニ御座候通之御尋ニ付申上候

以上

慶長十七年ニ此

柳町名主

甚左衛門

○禰宜町　今雪駄町と云

寛永の頃ゟ此所ニ猿若の芝居ありしか之

堺町　葺屋町ニ移り

○芝居

中村勘三郎芝居ハ寛永元甲子年二月頃来りて初めて中橋ニて
芝居を興行す寛永九年伊豆国より御宅丸の御船御当地へ
入船の時金の麾を下され御船の先ニて音頭を取れり是元祖勘
三郎也慶安四年辛卯正月より四月まて御城ニて御能被仰
鳥目五百貫文青地金入の猿若の衣裳を下されしと此時より
堺町ニ而芝居を以万治元年戊酉五月京都へ上り大内へ召されて
御前ニ而猿若清き猿若狂言を奉り御褒美として
猿若衣裳を下さる丸の内に五つ柏紫の糸ニて縫金銀ニて之付
猿若の衣裳を頂戴す此時より名をもらふ同年九月
江戸へ下り万治元年元祖勘三郎死去二代目明石勘三郎

一弐代目勘三郎ハ中村伝九郎とも申当時迄ニ至而八代也
市村宇左衛門芝居ハ元祖村山又三郎とて泉州堺の者なり
初て江戸へ来り下り其頃ハ舞子を踊らせ二十五人
ニて若衆狂言抔をいたしける也 是寛永十年也 慶安元
戊子年右又三郎病死せり 弟の村山九郎右衛門名代ニて市村
宇左衛門と云元作とて者九世元ニて右芝居を五十両ニ市村宇
左衛門浮竹(?)与三ハ二代目明石勘三郎ニ弟也 此時勘三郎より
鶴の丸の紋所を譲受しかハ紋付ニて芝居をさし寛文七年
より二番三番とつゝき狂言を仕初し 初て仕候よし市村宇左衛門
まで九代なり

江戸橋　東南筋

○青物町　又俗盗橋とも云　青物町と坂本町への渡れ

○海賊橋　或ハ海賊奉行向井将監殿屋敷ありし故の名なり

武家系図ニ云　向井将監殿　伊兵衛正勝　後伊賀守と
云　初め驍将の人也　武田信玄ニ仕へ天正七年九月十九日討死
是向井家の元祖なり

○中の橋　川瀬石町の通り　一名小濱橋と云

○楓中橋　松平越中守殿やしきの前ニある橋也

○広(?)橋　本材木町四丁目五丁目の間北の橋袂ニ煉屏
ありし故也

寛文の比御鷹野の時御腰をかけさせられし所なれは
貞柱云此煉塀明和四年亥四月九日の大火に焼亡今は
絶たり

○地蔵橋　北島町と舞鶴町の間入口にかゝる
此所の道六筋にわかるゝ、所謂六道冥途の事に取る
して地蔵を据ゑしなるべし

○合引橋　南片側本多家伊達家屋敷の側にかゝる
此橋の下汐南方へさして亦南方へ引故の名也

○伊雑太神宮　北八丁側　神主　出口市之進
神社啓蒙曰伊雑宮　倭武徴出在志摩国答志郡　伊雑お大神也　相去八十三里

粟島座　伊雑宮二坐　世紀云天村雲命裔天日別命子玉柱屋姫命
粟伊雑宮大神宮遙宮也世或為磯宮且称太神宮御鎮
坐者非也と云し
或社司曰当所に鎮坐の来由はむかし釈潮音と云者公吉文大成
経を著しけるに依て伊雑の神官罪に処せられし事ありて其後に
付て社家江府にありし故伊雑の宮を移りし移し崇え奉りしとぞ
いつ比此鎮坐ありしとなし

○山王御旅所　加賀町　永田町山王の持

○薬師堂　同所　別当上野末医王山智楽院
本尊恵心僧都の作なり薬師は山王の本地なれはあるなり

男衾郡にて當院本尊阿彌陀如来ハ恵心僧都二十一歳の御時自ら彫
像し彫刻し胎内に納め置れし霊像を經て相模國大場
おいて安置し尊像自らあらはし出現せり然るに北条氏の兵火にて
堂宇焼失せしにも尊像損壊し玉はれざるを寛永九壬申
年正月八日より十二日迄霊験のあらはれ鈴木氏 諏訪部氏大坊に
より此事を訴ふへ慈眼大師へ告て彼の尊像を東叡山に移し
奉るも當院第二世厚見法印と大師一同附属し玉ひて厚見の
寺に祭の日吉山王遊幸の形として 都城より東にある如来濡衣
の地所を寄付し置かれたり 霊跡ハ山王権現御旅の庭
生神にまた本地ハ則薬師如来即ちハ東叡にて本尊を遷へ奉るべし

と号す新て寛永十二乙亥八月八日新に當院ハ安置す其年元鎧島山
と号し尊像安置の後大師の命にて因て蓮王山と改号あり

○ 天満宮社

江戸神田にて菅神真筆の御像を安置す 社の本 諏訪井 常月所持
まことなり

○ 鎧渡

加賀町より小網町三丁目へわたる

里諺に云 往古此辺は入江にして大渡あり 源頼義奥州へ
下向の時俄に風荒浪起りけるに 鎧を沈め龍神に
いのりて渡ることを得て終に奥州へ下り賊徒を平らげしといふ

○ 鎧ヶ淵

同所牧野家屋敷の側にあり

○甲塚　同所牧野家屋敷の内にあり

往古八幡太郎義家父頼義朝臣の太刀鎧を埋し鎧塚と

云ふ由河州壺井記にあるし放生寺説也

江戸砂子にいはく小山の上に穴の岩あり文字もなし唯ちいさく長

き石也是は将門の兜を納めたる所なりと伝ふとし

紫の一本に云俵藤太秀郷平将門の首を切て甲を取

て是迄持来りしが此所にて甲を取落しけるを埋み塚とし甲山と

立る頃年迄此屋敷の内に塚山の様にして大木ありしが大火事の

後おもり見へずとぞ

按するに江戸砂子の説と相違也是にて江戸名所の記も扨して子孫を

頼家義家の事なるべし又は将門頼朝の事跡に不数ありて其説の

憶事を得此塚人続くなるべし

○霊岸橋　かやば町より霊岸島へ渡る橋也

○亀島橋　霊岸橋の西川口町より八丁堀へ

是は此辺古しき元禄年中初て掛りし亀島町に掛る故に橋

の名なれ

○八丁堀

紫の一本にいはく寛永年中船通用の為に長サ八町に堀通さ

れしと也

○高橋　湊町より八丁堀へ渡る

○稲荷橋　八町堀五町目にて南の橋詰に稲荷社ある故也

○稲荷社　橋詰にあり　神主　甫喜山内記

○鉄炮洲

寛永の比井上外記稲富の両家大筒の町見を試みし所なり此

地は今城に不遠とて鎌倉由井か浜にて替立行しとなり其の跡

築立られし故に此名有り此地南北凡八町有りと続江戸砂子に

見ゆ

貞柳云此島の形鉄炮に似たり此故に名付共云と延宝頃板

江戸惣鹿子名所大全にも見へたり

○寒さ橋　鉄炮洲より築地へ掛る一名明石橋とも云

俗にさんけ橋とも云

○萬年橋

昔しは板にて橋杭は石なり因て萬年橋と名付し

○卜養屋敷　鉄炮洲築地明石町の裏

半井卜養の屋敷の跡の地続き

卜養は東都にて名高く田にしこみ地をなしたるに　お科を望みの

貞柳云此節も明石町の裏と申しは誤りなるへし　予

寛文江戸絵図城所持て此所地をなして十軒町の南の

末にあり

○西本願寺　築地　本郷より輪番

寺傳ゟ元祖上人より十一世顕如上人ハ文禄元年十一月廿四日化す
其次ハ准如上人ゟ是西本願寺の祖也天正の比故ありて東西二派ニ
分る准如上人ハ寛永七年十一月廿九日ニ化す 其次良如上人寛文二年
九月七日ニ化す 其次寂如上人也 御入国の砌当寺ハ浅草橋の内
横山町ニ三丁目南午ニ有し寺地を賜ふ 明暦の大火後此所ニ移さる
いふ所ハ埋立し所自然造成れ

円正寺 浄見寺 法照寺 法雲寺 浄立寺 法光寺
成勝寺 円光寺 善大寺 西念寺 善照寺 覚証寺
善正寺 安養寺 真光寺 常崇寺 敬覚寺 久賓寺

長泉寺 浄光寺 善林寺 福泉寺 真教寺 浄宗寺
正法寺 慶善寺 明西寺 延浄寺 妙善寺 光源寺
妙泉寺 正満寺 浄泉寺 正善寺 長安寺 真証寺
宝林寺 梅岸寺 万福寺 西照寺 万行寺 報身寺
正覚寺 勝林寺 浄徳寺 光西寺 延重寺 源正寺
福称寺 妙覚寺 唯心寺 光徳寺 円徳寺 称揚寺
善永寺 妙延寺 実相寺

吾妻日記にいはく 明暦四年 本引町の海手 西山日向守 築地
ことに仰付られ 明暦四年二月朔日 本挽町築地奉行長尾
川三左エ門代りとし 伊久間宇右ヱ門 仰付られ

○霊岸島　或ハ江戸中島と云しよし

寛永記云寛永元年霊岸雄誉上人法力を以て江戸八町堀海上は該檀那土石を運び集て陸地に築き一宇を建て霊岸寺と号し是を霊岸島と云　萬治三年八月に霊岸寺を公用の地となれと云々

○一之橋　二之橋　三之橋　新川ともいふ

○随見屋敷　一の橋詰　茶飯許店と云

江戸砂子後篇云川村随見第宅の所也此随見老人ハ元禄年中諸州の風土を考海を築き川を堀てあらたに田畑を開きて土地を知れる名誉の人なりと云

○随見屋敷　一の橋詰　茶飯許店と云

江戸砂子後篇に川村随見第宅の所也此随見老人ハ元禄年中諸州の風土記を考へ海を築き川を堀てあらたに田畑を開き其土地を知るゆへ名誉の人なりと云々

○大神宮　新川　勢州　慶光院宿地

婦女伝云山本大夫ハ慶光院開山比丘尼の子孫なり今に至て慶光院住持ハ代々山本大夫娘也　山本大夫ハ三百石玉わりし今　特筆家伝代々御附也　慶光院様式ハ伊勢の跡並にて江戸に来府之節ハ通り中伝馬町並江戸霊巌寺に旅て屋敷拝領来府之節は旅宿するの地に一社を建て伊勢太

神せと号けしを大神宮の社を当島にハ神明と称せり是伊勢天
照皇大神宮と号するハ勅命に依てなりとぞ
自雄云 明暦し江戸古絵図ハ今の吹上 上覧所の辺伊勢上人
の居しきあり其新川の地ハ此替地なるにや

○橋本稲荷社 霊岸島総鎮守 別当真言宗 医王山 高野末 円覚寺

略縁起ニ云当社正一位稲荷の社ハそのかみ紀州高野山の林麻 樹本
の里ニ鎮座ましまし 弘法大師の真作にてましまし大師入定し給
筑紫に於て神と出現し玉ひ夫より後朝の北京都東寺御建立に
折々不思議に應現し玉ふ所の御姿を大師時のあらはし給ふに稲
しあふ日城随一の霊像也然るに此霊岸嶋を往古中島と号
せし時神体を此社に移せしより霊岸島の鎮守とハなれり 霊験
感應のいちじるしき事委く縁起に見へたり

本尊薬師如来 同寺

当寺本尊 瑠璃光如来ハ三州鳳来寺の薬師如来と同木同作にし
理趣仙人の彫刻なりし其の尊像也此尊像を此所に安置し奉る来由ハ
当寺の先住鳳来寺より移り住み霊夢を蒙りて供奉し来りしと云
故に当寺の山号を医王山と称しけるよし偏に此尊像を医王善逝と
申奉るにハ也

恵比須社 霊岸島

稲荷社 同所

此社ハ昔ハ今ノ向井家の屋敷の所ニあり　向井将監海賊役なりし故
所へ向ひ替し時此社をも今ノ所へ移せしなり　江戸砂子にあり
○湊橋　霊岸島より箱崎へわたる　此川を新堀といふ
○豊海橋　俗ニ乙女橋といふ　新堀大河口の橋をいふ
○永代橋　長九百十間余幅弐間余ある橋也
此橋ハ或説ニ云　憲廟御年賀の時掛らるゝ　故永代といひて
名付られしと云　元禄九年始てかゝる　こ以前ハ深川の大渡しとて船
渡し也
○箱崎町　北新堀と北の町　行徳河岸の向ふ
求江雑記ニ云　筑紫箱崎の縁をとりて此所の名とせり　故ニ深川

八幡宮記ニ神輿船にて此所よりまはしけるに是ハ筑紫箱崎へ
着けるとて八幡の神輿まはしける例なりとて　又或説ニ昔ハ此所ニ
箱の池ありし故の名なりと此説いぶかしきなり
○崩橋　箱崎町より小網町三丁目へ渡る橋なり
○永久橋　崩橋の南なり
或説ニ南橋ともいふ湊橋より河岸の築地　昔ハ海也しを享保の比
御埋立の時掛りたる所也　湊だしより東の築地ハ了
古例なり御埋立の時築出したると
○石川島　すなはち島也　石川氏代々の宅地也
諸家読鑑ニ曰ク石川重次且つ子政次慶長五年御使番同十九年

御目付呉子重信代々此地に住居なしたる記せり
白旗直補 或人の説ニ云 大猷公の此時異国より鎧を献
せしに誰と是を推の出て奏者なき人なし 公の直く
旗本の内穿鑿ありしに不叶時に石川氏の先祖大力なりしを
時年来思召に適ひ彼の鎧を片手にて持出て披露しける
公御感ありて御褒美の品を望み申へきよし仰有しに其鎧魚を
拝借して居住し永代安堵し宅地を広げ申請を許されける
に即望に任せられ今は玉り心まかせに安堵いたせる
とこに此所鎧島と云り

○佃島　白魚の名物也

昔摂津国佃の猟師此地を拝領して佃島と名付られし
再故江戸御城下に云佃島はもと安藤右京亮殿中に石垣を積て太
を進上して住居せしに安藤家より米を賜ふは魚人に又魚を
まいられ彼家の抱の猟師ゆへ住吉を祀るは是より
後の事なりとかやと云ゝ

○住吉社　佃島之内　神主　津守日向守藤好昌

此島は皆漁人にて摂州の者なれは住吉を勧請し建立せり
江戸城下に出せり
神社考曰 摂津住吉神社四坐 社家者説曰 第一天照大神 第二宇
佐八幡明神 第三底筒表筒中筒 第四神功皇后と云ゝ 然ては当社も

右の神体也と

日本橋　南筋

○日本橋封疆藏
明暦年中初て作る也　此所ハ四日市場と云なりし　四日の市
立し所のよし

○式部小路　日本橋南二丁目新道成云よし
寛文江戸図ニ久志本式部宅地此所ニ有故ニ名とす
貞雄云　寛文九年壬申九月六日　大猷公より久志本式部へ此会
所を下されし其前拾集ニ見へたり

○鹿児島稲荷社　久志本氏屋しきの内ニ有
宝永年中薩州の屋しきより勧請なりよし

○油町

○新右エ門町

○箔屋町　通四丁目の横町

○下槙町　中ばし入堀の河岸通り此堀ハ紅葉川と云

○中橋　日本橋より南
江戸砂子ニ日本橋四町南也是より京橋へ四丁あり京橋の真中なれ
いまは橋もなし
貞雄云　橋もかけられども京橋の中なる故中橋と云ふ也とぞいへり

大体様子是等しく人の事を知らずして推量にて書る説と見へたり
然ハ此中橋の堀と紅葉川にて呉服町鍛冶町の辺の御堀也
堀後までも中橋と称せる故に則ち掛りし是を中橋と云し
正保の比此堀ハ半分埋られて今の如く成りぬ故ハ上古
成り地名とハ御なりし疑ひなし 橋ハなけれども名付るにハ有か
所を上ヶ寛永十三年の江戸図を所持せしかハ見ニ之ハ有

○紅葉川　下まき町と大鋸町の間入堀成ル

貞拙云御打入し後堀らせられる川也 正保し比中橋より西の方
御堀端迄の所埋られて絶とある京中橋より東の方も承応年
中少々埋られ 松本孫右衛門願ひ申ける 是不用の堀なる故

○お満稲荷社　中ばし

此辺の穢多にて江戸を開発し町屋きの時より紅を御
奉持ち京橋中橋おまんが屋にて云らし享保二年丁未
年浅草息女にて住不思議に御蔵にて
像を持来体真に図せしか著実異る

○大鋸町　中ばしの河岸通り

○愛相橋　松がり町と懸れ橋之

○鞘町　南伝馬町本槇町也

○鈴木町　南伝馬町三丁目横町有所なり

○常盤町　南伝馬町横町

○具足町　裏ハ京橋の河岸竹町也

○正木稲荷社　たゝみ町　神主　鈴木大隅守

○観世稲荷社　京橋南三丁目横町

観世太夫屋しきの鎮守也何者の比祀ることいふをしられ
観世の家の仕来祀といふし伊賀の服部一党なり東山殿につかへて
観阿弥と云同朋之楽に達して猿楽の業を習しむそれより
世阿弥それより音阿弥それより観世三郎と号し猿楽をなす今春が
聟となりて後藝術熟し子孫相続す

○京橋　南筋

京橋より通りを銀座四丁目迄行て夫より尾張町二丁目竹川町ニ至
出雲町二町行て夫より新橋也

○紀伊国橋　木挽町一丁目紀州侯屋敷中にあるを以ておふく

○新馬場　同四丁目広小路の事を采女か原といふ
昔は松平采女正定基屋の鋪なりしを享保九年甲辰正月晦日の
火災に類焼して後揚地となりて新馬場并馬場采女正ハ
外の地三町目の北裏まで移し替しと也にけり

○木挽橋　同五丁目より三拾間堀へ渡る橋をいふ

○采女の井　采女か原の内
松平采女正屋しきの時の井也屋しき替ありてもこの井ありとなん

糀町の中ほとり日毎に鐘をうけ又鎖ともあり

○火消屋しき跡と　本槇町五丁目東裏　当時柳生殿屋しき是也

今の柳生の屋しきいにしへ定火消御役宅なりしを此地享保九年

甲辰正月晦日の火災に類焼せしより此御役宅ハ四ツ谷御門の内へ移

されし此二印の火消を打水と唱直綱なり

○芝居　本槇町五丁目　歌舞伎　森田勘弥

万治三年太夫元にて芝居をはしめて始は坂東又九郎次男

又七を養子とし森田勘弥と名乗又九郎へ芝居を譲り相続す

当勘弥まて六代に及ぶ享保の末勘弥難儀芝居休み内河原崎

権之助と云者新しく芝居を相続す勘弥休故再ひ当時之直(?)相続也

○芝居之旧跡　同所山下町見付の辺(?)なり

貞雄補　以前ハ山村長太夫芝居ありしか正徳四年甲午二月十

五日御城中江島大奥女一件の節長太夫ハ三宅島へ流罪被仰付しき

是より断絶せし也此土地大夫　和泉太夫　操芝居なりしも今ハ

断絶なり

○汐留橋　同七丁目より芝口新町へかゝる

○新橋　大通り出雲町より日比谷へかゝる

貞雄云　文昭公之御代御内府御用あつて出来宝永七年

庚寅二月十七日御奉行仰出され佐竹壱岐守　松平兵

庫頭田村下野守奉行ニ而御目付なり　同年九月廿七日　修理出来(?)

しも撫りの家々は寝覚なり下をさもしにも元は芝口御門と称し　日比谷
町に芝口御門立られしが享保九年甲辰正月晦日
午の刻山下御門加賀町より出火して焼亡し後絶て再興なし

○涙橋　山王町より南へわたる

○土橋　幸橋の御堀へ留りの所也
貞享元年比所汐とめと云　汐留し事両国之江戸
砂子に汐留といふことは書して語り伝へし　異に見る所を
南に用て角所と云

○今春かしき　内山町に有り

○八官町　加賀町の南
元和の比八官と云唐人に屋しきを給ひし故に町名とす

○穀豊稲荷社　同所　神主　宇治川若狭
当地にて十五ケ所きの鎮守也

○日陰町　数寄屋橋より山下御門の御堀端なり　幸橋山下町

○有楽原
再校江戸砂子にいはく数寄屋橋内にあり原の跡より元数寄屋
町二丁目三丁目の所なりといふ　有楽斎織田有楽の宅地なりき
これより後田地に成しとぞ

城南

○櫻田

風土記曰櫻田郷公穀四百六十三束三字田号櫻田者以其郷
之田及野櫻樹多也
源順和名鈔曰荏原郡櫻田
求凉雑記云昔より御入国以後吹上御庭へ移させられ所
となり

○山下御門　又姫橋　俗に鍋島御門
寛文江戸図に姫御門とあり山下町ハ則ち山下御門と云也

○姫が井　又櫻の井　山下御門と幸橋の間にある所なり
此姫の井ハ旧ハ姫御門と云ふ其所にて此辺の所きわれて一年に自米

其井筒は井の中へ古来より筆に入置たるとて付井の蓋を三枚
ことさき書物の趣をもして渡されるとしたるに左助と云ふ人に取出す事有りしが
其も今に鎚をおろしおきてこの板を以て取出しけれと
再校江戸砂子に見えたり

○封の井
桜田の内所不詳と右同書に見ゆ

○幸橋御門　又御成御門と云ふ

○新橋　寛永しの末より延宝四江戸図におゐて新橋と
なり
新見随筆に昔は新橋芝口御門の事なり　宝永の比出来享保九年

正月廿九日大火の時焼失せしとなり

○虎の御門　評定所の西なるらむ

紫の一本に云奇道灘より出陣ありて万民共に堅固なるべし

千里ゆくとせよまて千里戻るゆゑと祝して虎の門と名付られし

又御入国の時御鈎命ありとも云つたへし城記せり

○白糸の滝　松平[illegible]　藝州侯向屋敷なり

江戸庸わしに云西川の水残せきる水は溜り瀑れ流の末見ゆるに

所なりや

又云ふ之しかてしか糸しら糸の流るる流をみるのみなるよみ

此並の水よりて出来るなりやと存り

○潮見坂　井上河内守殿と松平流石守殿の間の坂をいふ

○柳の井　三浦志摩守おしきのまへ

江戸砂子浅草と村井の井と云ハ此井の事なりや男女の

○霞ヶ関　松平藝州侯と松平流石守殿中間の坂

武蔵野地名考云上古荏原郡に属し今ハ豊島郡也

或古記曰荏原郡霞関日本武尊為蝦夷之備関也一歳

来連綿大被置之挙國之勝景而然其遠眺隔雲霞

故有霞関之名云々

名所方角抄云霞ヶ関西へ高き所東南の所なれば不二

も見えて西中川流れをしといふ

秋の称號にいふ要の実　さくら要なる

続千載集　春　　前大納言為世

おしくさき春の要の実も何をそ誰の人代さ見しもやめも

同　春下　　従二位　章子

おもかけの春の要の実やまも匂ふ月の残りしあやさよる

新拾遺　雑上

いくつらに名残のしるしみて東路の要の実と春を養ぬる

宗祇国記にいふ名をしるし　あの実をかへて　こゝそこのこさ五のよみ

東路の子とゝいひすてんさと

東路の要の実に年越てかまも都にたちかへるらん

都まていつくも見まく思ふ君にかもめし　要の実も春を待らん

往古此要を要山といふ　右大将頼朝公天下を治め給ひ時に奥州征伐の時に護

を其庭園に地形を取りて奥州街道に隅田川の限り要山の

禁庭に要害を構て要の実と名付け江戸赤坂の表　是を以て

是より往還のよし　要山稲荷は社領なり

○陶山の実　井上河内守殿に成りて御屋敷は陣中さかさ也

赤坂溜池坂を下りて坂をまこ湖べそこ年の畝に訛りとて不便説なり

と江戸砂子に見ゆ

○蝶螺尻　一名　蛍

虎の門より永田町へ出る南の裏通りを曲りし　所の名なり

まゝ此辺鶯多し依て鶯谷と云也

○永田馬場

江戸砂子云永田氏の所領下鋪並て有所今も永田姓多くの
所〻ありし也とあり

貞抱云是九違也今現に永田辻にて永田右馬之丞大番衆
の方に屋敷あり

○茱萸樹坂

丹羽家表門見通し内藤紀伊守殿本多伊勢守殿中屋敷
の間九鬼長門守殿中屋敷より出る坂をいふなり以前左側にくみの
木有し故の名也

○星野山　山王権現のやまをいふ

○山王神社　永田馬場　神領六百石

諸社一覧に曰太田持資長禄元年築江戸城文明年中移
山王権現於城管之中云々

神社略記曰始日吉近江国比叡山鎮守也祭神大己貴命
の子大山咋神後数神を祭り凡二十一社有りと云ゝ

江戸砂子云当社ハ入間郡川越仙波にて一所なり慈覚大師
草創にして星野山無量寺と号し天台の霊地として山王を
勧請有太田道灌文明年中仙波村星野山の山王を勧請
しその地今の紅葉山なりと云慶長年中溜池ノ上に移させ給ふ

今の社地也と云こ

別当 観理院　社僧 円成院 成就院 宝蔵院 長寿院
福聚院 智光院 宝泉院 無量院
智乗院 常明院

神主 樹下采女　社家 小川織部 千勝主水 千勝采女
金丸靭負 宮西頼母 正木主膳
諸井帯刀

橘樹 御本社 内陣の後 神木の井の元に有

当社の祭礼ハ六月十五日隔年也 江戸第一の大祭礼也

貞雄か云く 氏云こ 氏山王の社ハ 紅葉山に勧請ありて 慶長三年に溜池の上へ移させ玉ひしと云へり 中比麹町隼町の外貝塚へ移させ玉ひし事を述 後代かいゝて 集むらし侍ることや 此のみ

書云 此山王慶長三年に今の溜池へ移させ玉ひしと大書にも江戸砂子にも出たり 氏来歴を按ずるに 明暦三年酉正月十八日夜の江戸図を写し置けり 此図中ハ麹町半蔵御門外の今の元山王と称する辺に宮居有り 慶長ハ明暦より以前なり 慶長三年に溜池に移させ玉ふならバ 豈明暦三年の図に溜池の所に出ざる事あるや 是疑はしき証拠なり

吾妻日記に云 明暦三年九月の条下に 山の手山王類火に付て社ハ溜池の上松平主殿頭忠房屋敷を召上られて移し給ふ 御造立ありと云こ 役人よく改むべし

○櫻ノ井　井伊掃部頭表門の下に有 深サ九尺計

石垣を組上け釣瓶車をかけ並て有大井戸所

○妹ヶ実　此辺所々より千所惜きられ

城　西

○平河天神社　糀町　別当　長松山　龍眼寺

神社略記曰社説ニ当社ハ人皇百四代後土御門天皇文明十年六月
廿五日太田道灌当國河越より御城中平河口ニ勧請し奉ル
其後慶長年中今の處ニ移し奉ル故ニ平河天神と号すと云々
江戸砂子ニ云世俗ニ云当社の神体ハ銅五本骨の扇をもつて以て
是ハ草ニ風を加ふ其ハ少の心をもて古語我以て敵たちを

多くの人大神風を以て千里の外ニふき退け堅固の表事なり故
せられりとぞ

○貝塚　半蔵御門外平川天神の辺近の惣名なり
昔し此辺ハ山王社有り再校江戸砂子ニ云愛宕青松寺此辺ニ有けり
又いはく甲斐塚ありし甲州道の一里塚ありしとも亦甲斐塚
と云ハ今も此辺の地の内ニ有りと云　貝塚法事の塚といふ
来歴詳ならす雪松寺の跡ハ今の馬場の南ニて大寺なりしと
今つたふる数くにてのこりと行り
貞雄のいはく目塚法事の塚ハ玉虫八左エ門の元ハ寺内ニ有りしとぞ
南向茶話ニいはく目塚ハもと芝青松寺の旧地ニて寺青松

甲斐といふ人草創なりし此所当時玉虫氏屋敷のうちにその跡あり
故に坂を甲斐坂といふなり
今按に玉虫氏やしきに塚あり是を甲斐塚といふ其上に古き石
碑あり年月日も見へず法号もなく只某氏女とほりつけたるかあるの
こゝの八幡宮に崇めて今に祠あり
○元山王
松平左衛門督殿屋敷の脇通り井伊家屋敷裏へ出る小路の
上通し左方中ほど傍に小社あり山王の旧社なり
○やすぎ水　貞雄増補
桜田井伊家屋敷下御堀ばたに井伊家の番所あり此番所の
前より御堀の方へ下る坂あり古水際に石にて尺四方斗
に井の如く作りて蓋あり所て見ゆる井にあらず深さ
三尺計りあって水つき出す事いつの頃にや旱魃にもかはる事なく
諸方より見物す名水也水の涌出る様はきあふひ立て湯と同きは
水道あるも寒暑ともに其かはらず甚冷にして不日浅の如くなり
○赤坂御門　此外を赤坂といふ
赤坂近辺昔は大塚の荘といひけるなり　赤坂の名もこの以後の事也
○梨の木　井伊家屋敷の裏つの所にあり
此井伊家のやしき往古は加藤肥後守清正が宅地なり
貞雄云清正子息肥後守忠広の代に故ありて断絶せし後寛永

九月中年七月十弐日所前吟道あれしき共一覧に井伊掃部頭
直孝様御也井伊殿より此までの上入しきハ常盤むし由今の大名
小路亭跡なりしき也

○玉川滝

江戸雀に云松平出羽守殿やしき之内の流の末も赤坂の溜池に
ゆく也此滝をいて此の流を名付此ハ浪花色成あり
云也開花枝を与へていひ名付上ハ玉丸の水成しけれ
此岩ネの内のより流出れ赤坂田町の方より落る又こゝに云

○清水谷

江戸雀に云尾張殿紀伊殿井伊掃部頭殿の間の坂を云

此坂之の大なる紋かたし赤坂もれ之此坂の左に清水あり

○柳の井　清水坂の下

里説に云清水流れも柳かけにあり西方の方より此井を名付也

○土橋　清水坂より紀州御中屋しきへ行喰違土手の前

○増上寺旧地　土むしの辺貝塚の内

寺社拾遺に云往古ハ光明寺とて真言宗也至徳二年丑の夏
此所にて住持聖聡論議有て法然上人より七世の孫かた小石川伝
通院の開山西蓮社了誉聖冏上人より此法を受学完乎
実にある可成聖聡浅草の辺まで追ひ行て答へて了誉の答に
帰依して真言宗を捨てゝ浄土宗となる光明寺を改めて

増上寺と号し了誉上人の弟子となり大蓮社酉誉聖聡上人と
かうしとそ
今山王の末社の稲荷の社と云し鰐口は
東照宮未御入國前江戸を城とせし遠山丹後守直景
の山王の社へ奉納ありし此寺預りせしかとふちも
後に山王は御入國以後御造営有て大社となりし古は
此末社になりしこ江戸の神社多なる中に子守ぶちこ成
之ける古器なるへし 遠山丹後守直景は北条家臣
江戸の城に居住しけり

永田馬場山王社末社稲荷社に懸る鰐口の銘

差渡し曲尺壹尺

遠山左衛門尉景政甥

直景 四郎左エ門 丹波守

直宗 紀伊守 景次ニ為ニ

景重 平右エ門

与三左エ門 源斎

半左エ門 右ノ又 [illegible]

藤九郎 早世

隼人正

女 遠山右馬太夫室

女 太田越前守室

南政 丹波守 左衛門佐

直太郎

綱景 甲斐守

景宗 右馬介

右衛門太夫 新四郎 二孝左エ門

景吉 小太エ門

小柴又八郎 [illegible]

景利 喜之開

忠春 浅草観世音院

孝星 兵部大輔

直定 久左エ門

直長 五郎左エ門

直清 利之開

直政 半助 六左エ門

直 吹部作

直信 求馬介

女 安間次郎室

女 アリ入室

女 島津左近室

女 高木下野室

女 大函寺駿河守室

女 瓶歡出羽守室

女 高尾左衛門室

女 翼 紅雪室

女 宮人様太右衛門室

○常栄山天性院心法寺 浄土 智恩末 麹町十丁目

開山然翁照山上人栄公大和尚 寺中貞松院 寂勝院

千手観音 留守檀金立像 一寸八分 秦川勝守本尊

地蔵尊

往古は当寺に境内甚広し 源半若丸奥州下向の時当

寺へ来請仍而 里沙に在

貞応は当時に而谷庄の内也 当時の鐘銘

延宝四龍集丙辰天 夷則三日

武州豊島郡江戸麹町常栄山心法寺

住世廣蓮社寂誉上人心了路指大和尚代 云々

○石雲山常仙寺 禅宗 洞家 四谷龍昌寺末 糀町九丁目
開山祥岩和尚 虎菊沙
○村高山長福寺 栖岸院 浄土 知恩末 同八丁目
寺伝曰開山 世誉直入上人 開基安藤對馬守重信
往古ハ三ツ谷ニ有之長福寺と云 御入国の後 台命ニ依て改宗し
当所へ移する 安藤氏開基也
山内火防正観音 康仏 頼朝守本尊 前立 楠正成守本尊
鎮守正一位稲荷社
本尊 阿弥陀如来 恵心僧都作
○鎮護山善國寺 日蓮宗 池上末 同六丁目

開山 佛乗院日惺上人 鎮守毘沙門天安置
慶長三年七月十日寂 按ニ此寺上古馬喰町追廻馬場の側ニ有り
寛文庚辰二月朔日火災類焼して此時爰ニ移る
再板江戸砂子ニ 当寺の毘沙門天土中より出現 霊験あらたく
多し 実ことに聞れとあり
○金子十郎家忠墳
江戸砂子ニ云 糀町元山王 越後守光長御邸の内ニ有ると
云伝へと記せり 按ニ然らハ貝塚の辺なるへし 家忠が子孫ハ武州
戸田蕨辺ニ多くあり
按するに今云處の貝塚ハ此家忠の塚跡謂ありしハ此誠なるやいぶかし

○番町　東西　十六町　南北七八丁

舊事名誌に云　壹番町より六番町迄名付られしハ元和寛永の比
天守御番衆の居住せし故此所にて壹より六迄番組より六番組
まで有けり　故此名有りしとなり　表裏新道抔の号多く別有けり
とぞ

○善國寺谷　糀町六丁目より番町へ登る所の谷也　鈴降
谷ともいふ

○地獄谷　裏二番町と五番町の間の窪なり
江戸砂子に糀町三丁目の裏より二番町へ行道を書るハ誤り也　又
糀町三丁目の裏ハ五番町也

紫の一本にいはく　昔ハ此谷に行倒多く　非人死骸を捨　又ハ成敗
に行ひたる者を實ハ捨し故此谷地獄の名あり　世人忌て樹栗橋
本の生茂りたる所ゆへ樹木谷と云なりとぞ

○法眼坂　表二番町より表六番町へ行處の坂也　坂を云
此辺ニ宅間法眼と云医師住けり　故名付るよし　然るに江戸砂子ニ書ハ
誤りなるへし
紫の一本ニいはく　此所ニ宅間法眼と云人の屋しき有坂際に有故名
付たるとぞ　此往の

○御厩谷　壹番町通りと表六番町の南裏通りの成す
里俗にいはく　昔ハ此辺御厩ありし故の名也　今も里俗御厩谷と云ふ

駿河台馬の足洗ひ池洗足とも云
○願正寺谷　地獄谷の西にて長谷川久三郎屋敷の前を下
の道なり
昔此所に東護山願正寺と云浄土真宗の寺有し故の名なり
此寺今は原町にひけたり
○鍋割坂　壱番町堀端阿部家と布施家の間より升也
壱番町へ出る坂也
○切通し帯坂　表六番町より市ケ谷御門へ出る坂也
○三年坂
南向茶話に云市谷御門の先より六番町へ上る坂をいふ　寛政十二
年御郭普請の時行はれし故三年坂と名付しと
或説に云古の説ハ此の坂の下今本村元町より行て東蓮山三念寺ハ
此所に有し寺の寺地此坂下此寺の中に在し三念寺の跡地有
るよし此坂をたづぬるに共に三念坂の名を付れたり
○行人坂　花房家の前なり
異説に云中比此坂の傍に行人の住居有し故行人坂と云又法眼坂とも
昔は行人坂と云一名は法印坂とも云法印坂を誤りて法眼坂
と云法印何某此坂に住居して稲荷を勧請し霊験ありて此坂
より怪物出る抔流言せしよりて名付し
○花屋しき　表二番町杉田氏の中にありしと云

○蛙ヶ原　三番町

旧事菴話に云三番町少しの原有り昔池有りて井る也の蛙埋殺せしより名付くるよし云伝ありしに今のありさまは池のしるしも所も見へずとかと云
将蛙を放せしは某何某の河津氏の宅地ありし故明地と成りし事なり

○皿屋敷　麹町三軒屋

耳底記に云慶長の比吉田大膳亮と云人の屋敷ありし此二千五百坪の所を御用地に上りその辺に吉田やしきと云し寛文年中青山氏拝領有りしより後青山氏も乱髪せりと云時のこまりし故記せり
将江戸砂子に牛込御門の内とするは非也麹町三軒家を元八木氏の御やしきを吉田やしきと云ひしは青山時堂と云人の屋しきと御座候

城北

○世継稲荷　飯田町坂中　神主　吉川式部

祭神　雅産霊　倉稲魂　保食神　三坐

略縁起に云当社も此地に鎮守の由来久しく星霜を経る古跡也
往古耕作の地なりし時文字の頃より山の麓に社を崇め鎮守となし
麓に沼池ありし故其ところを渕といひ東の流れを江戸川筋となす
社のまはり畑地六千歩の地は宮境内なりし太田道灌江城草
創の節より此辺を田安と云ふ当社稲荷の神号を擁しまつる御入
国の折からは神木槐の木成るを以て世継の宮と上意ありし
けり記すると云し

○飯田町
求涼雑記に云 往古ハ千代田村と云し田安と続く田畑なり 御入国の時
此ほとり田安迄へ御成の時 此所の里民飯田喜兵衛といへし者御案内申上
十七軒ありしていまだ皆々田畑を出て 只飯田氏ハ御前に出し名主を仰付
所の旧畑ども中なる所以来此所の主たるべしと命せられし此所
を飯田町と呼ぶとしとぞ

○飯田坂
むかし飯田喜兵衛と云者御案内申上し所の名なり

○冬青坂　飯田坂のならび

○柳の井　もちの木坂の酒井家の向き側にあり

○錦の森　同所中坂の森をいふなるべし

○二合半坂　もちの木坂の並び北の方
異名 江戸砂子に日光山半分見ゆると云し

○蟋蟀橋　飯田町西裏通り 堀留より小川町へ渡る 石橋也

○俎石の渕　飯田川の北の堀留辺のうしろ

○小川町
むかし此辺ハ三崎村と云し田畑の地也 後御旗本衆の御屋敷となる
畔道を直ハ小路と御定有る故ニ其通筋まゝにして広しき所を
づしはりく本末の一ッ字ニ見ゆ 又此所を錦の小路といひし
貞地に云 上代三崎村と云しかや 御大名の屋敷ハ鷹匠町

元禄六年九月十二日御日記ニ云　餌差衆止メラレ候　餌差町
ヲ向後富坂町と改名　亦鷹匠町を向後小川町と一ツに改名
と仰出さる
○俎板橋　蝉坂の向ニ流る竹本氏　赤井氏中坂の下北の方
辻番所の前に構へある石橋也
●大　橋
飯田川にある九段坂の通ニある橋也　俗ニ是を誤りて俎板橋と云
○神田ヶ淵　又小川の流れ　成瀬大和守殿屋しき内にあり
異本古戦録ニ云　冨士見の櫓の艮ニ當て小き池有り道灌ある時
興望して
其時小川の流れ狭ニして岸の根方を洗ひ云々

江戸大平より小川町と云ふより　武蔵之或説記ニ此辺の地西
が清水ヶ有と云ふは誤り也
○護持院旧地　神田村一ツ橋の外芝の下也
此所を新鶴ヶ原と云ふより江戸砂子を見るに或人のいふ　当時一番
原二番原三番原迄差置ありと云ふ
○小栗坂　水道橋への通りなる坂を云
此所ニ御鷹匠小栗某の居宅ありしゆへ名とす
○三崎稲荷社　小川町水道橋西の方　神主　和田治部少輔
当社縁起ニ云　小川町ハ往古水道橋　武蔵国豊島郡三崎村とて
田畑ある所にて一村の惣鎮守也　寛永年中　武士地と成りて三崎

されハ元鷹匠町と云りしを元禄七年甲戌年、小川町と改て当社ハ
今の社地より二十間程辰巳ニ隔て戌亥向の社ニして鎮守なりしと聞
寛永十三年神田川通り堀割の時伊達陸奥守綱宗朝臣欽命
を蒙り、東ハ柳森限り西ハ牛込御門まて御普請ありし時当社
地ハ昔一の鳥居の跡なりしを此所崩して土を築立段々低して当
社の神主神職を遷し祝詞を捧け大守伊達殿初め祈託をなし玉
ひしに其より崩入られて御普請成就なりしと云々
此社ハ毎年二月初午神應によつて疱瘡の神事を施来り出り
するハ寛永二年二月初午の頃前に神主和田兵部稲荷の霊夢
ニ依て常に出ますや

末社 金山彦命神祭　金山彦命　大己貴命　二座
末社 尾落大明神
末社 白狐社
末社 疱瘡神社　祭神 氷宮神
末社 牛頭天王社　祭神 素盞烏尊
当社ハ七祀待と云ふ事有り 如何庚申年正月十七日祀りて
同廿三日夜ニ朝ハ大日廿三夜を拝し祀心月讀尊を拝れより神事
或人の説ニ是ハ縁限稲荷と云ふ此社の前にて婚礼の義子孫通さ
れ
神楽ハ通さすハ少し乱るゝと云ことも此説信し難しと有
故ニ神佛ニ其様の不慶を悦むことのあるへき也

○水道橋　此橋ニ並びて上水の大樋あり故ニ橋の名となれり
江戸砂子ニ云　むかしハ此川上江戸川の流飯田町の下を流れて之
を川の名も砂入堀と云て今もあり万治年中松平陸奥守
殿釣命を得て御茶の水を堀わり外堀へ流れ是ゟ
神田川と云ふ又此橋を吉祥寺橋とも云ふ也
貞雄云　上吉吉祥寺ハ今の小川町松平紀伊守屋しきの辺ニ
ありし哉御入国後水道橋の外今の石川松平家石丸
家などの所ニ移る也　明暦三年の大火迄此所ニありし哉彼大
火ニ焼亡の後駒込ニ移りたる如斯ニ明暦年中迄寺ありし
しかれハ橋の名ハ吉祥寺むかしと云也寛文の末までも吉
祥寺むかしと云し哉近室の記の比より水道むかしと申伝ふ事古絵
図ニ明白也
○小石川御門　此御門の外より小石川也
或人の云く此御門を永楽御門と云ふし昔此橋詰ニて永楽銭引
替たりしと云ふ
貞雄云　此説あやまり　此御門出来せし以来の事ならば
此御門より永楽銭引替のよし古書ニ見へ所無し
○袖摺橋　松平讃州屋しき南の方下ニ石橋を云ふ
相伝云往古ハ市谷長円寺の池の水出て此所の南より
飯田町堀留の堀ニ流れて落流せしと此所を神田川堀ありしの時

坂を埋て飯田町にて止む其時の坂に跡少し残せし

○牛込御門

新見随筆に云昔は牛込の惣門坂也四谷町より長坂血鍛
九郎などの頃田久左エ門殿などの並び申ちを番町と申し牛
込才は小栗などの居所有りし所は神田又其の居所の並び
牛込方を申その頃の道まで市ヶ谷に行き申し故牛込と四番町
の此所が殊のお屋敷となり申しそれ所を牛込御門の[illegible]
つ出来今の通りとなる

城　良

○三河町　俗に新小田原町と云　肴店有る故也

○天正十八年御入国の後三河の町人に初て此地を下さる之

○御宿稲荷社　三河町

○神田坂　鎌倉河岸より塩町へ坂つき　天和年中坂をくし
貞拾云今の神田坂の所より火災の後火防の為に土手
を築きを松を[illegible]に植らせらる　天和年中築替て今の
坂と成らせし也

○龍閑橋　神田堀にかゝる龍閑町のまし也

○桃ヶ井　竪大工町

江戸砂子後篇に御水屋しきの井有り 昔ノ老女此地を所持せし
此井名水なる故に御用申しきとなりとあり
○今川橋　本町 白銀町の堀にかゝる
天和の比始て此橋をかけられて此の名主氏今川善右衛門と
云者則名とす 江戸砂子に出す
○玉水の井　白銀町 大久保主水屋しきに有り 玉を沈めしより
○藍染川　かぢ町より紺屋町へ流るゝ溝也 又逢初川とも
○頬焼阿弥陀　かぢ町 真言 表善院
千葉介の常胤侍女守仏にしてありしを爰に安置すとぞ
○恵比須の井　かぢ町二丁目 北東の角

紫の一本に出す 此井を堀りし時土中より恵比須の像を掘り
出せし由
○お玉ヶ池　本名梅ヶ池　紺屋町のうら
○弁慶橋　和泉橋通りの橋也
○新封疆　紺屋町堀より通り 旧和田菜ヶ内
○神田広小路　享保に始まりける
○元誓願寺前
浅草誓願寺の旧地也 明暦年中浅草へ移さるゝ之
貞観云 誓願寺は上古此町小田原にあり 後西丸下に移され
其後柳原に移りしと

○赤山　市村座中しきの末申の隅四五間に揃ひけるの所也
むかしの轉罷場所にて云う

○新シ橋　和泉橋の下の方

○和泉橋　筋違橋の下
藤堂和泉守殿屋しきありし故に名付此辺を柳原と
云 北を向ふ柳原と云

○筋違橋　神田川にかゝれり　神田見付と云

○昌平橋　始め芋洗橋と云ふ
元禄の江戸図に相生橋とあり　其後湯島聖堂建立の時に魯
の昌平郷に因てまた名付く

○相生橋
江戸鹿子に云ふ筋違橋の内にあり　隅田町の横町の小溝の上也
むかしは町人とも家かくる故に云とぞ

○亀の井　連雀町
金田周防守やしきの内にあり　ます御家の名に放て名ぐなき
名はなりとぞ

○雁渕　柳原土手下辺を云
昔は此松平阿波守殿にありしと残し

○柳原封疆　筋違橋より浅草迄く辺は神田川也
昔は柳なかりしを享保の頃大岡越前守殿の比柳原といふ名を　柳を植へさせ由鈞命

在て枯らさりし今かく大木と成りて中古の人の字出来し柳
久備ハ云色々扨ハ此柳ハ云お他所まて此地なとてきたる柳原を
見えて称取し事ま物御りせしと仔りし

○柳森稲荷社　柳原土手下　別当　仁王院

神社略記云　社説云当社ハ草創不詳といへとも中古此所
の芒叢の中ニ大きし祠ありて鎮座ありしを元禄八年始めて建立
ありとかや

将軍家ニ当社の鎮座を年暦を知られすと言へとも昔より柳の
森といひ縁古此辺ハ柳多くありし所にて尺かりし故に柳原
の名を得たりし故其丈し千歳柳を移植て今に残りし哉

享保の比まて拄らさりし所と云

○駿河台　一説ニ不二よく見ゆる所に此名ありて又其説ハ云
紫の一本ニ云　柳駿河台と云ハ元ハ神田台といふ駿河府城下ニ
在住の旗本江戸へ召下され此台まて中きをおいてかせより
駿河台と云ふ云々此地の古老の説ハ昔し駿河亜相公御在しき
あり則駿河台と云ふ寺院なと多く有りといふ又或説ニ此辺
昔芒盛にて是を拓し初今神田の神主芝崎氏なる者の由ニ
社説ニ見ゆ

○皀角坂　水道むしろ駿河台へ登る坂也
昔ハ皀角樹多くありし故坂の名とせしなれと今ハ只一本ならてハなし

○太田姫稲荷社　駿河台土手　別当　松雲山安重院
縁起ニ云當社の尊像ハ小野篁卿承和年中隠岐国へ配流の時
海中より翁の難を助けて已まひ陰陽東寺太田姫の神なり
疱瘡を救ふべきと記しける海中ニ又ぬ則篁卿神像を彫刻ありし
尊像也山城国一口里ニ勧請せし也太田持資長禄二年
御嫡当城ニ在城し其子疱瘡を悩て城内へ一口の祠此所ニ遷座なし
其後今の昌平橋を往古一口橋といひしは是なり若林某次老
母常ニ此社を信し孫の疱瘡を祈り霊夢を蒙りて疱瘡
の難を救ひし支世の知る所也慶安元年九月若林某より
當社造立寄進せし疱瘡をいたといふ一口より敷ひ立てと

○淡路坂　昌平橋の方より駿河台への登る坂也
○甲賀坂　袋町より上る坂也
往古馬場昌平より御医師の中きありし所角ハ武家
世俗是を甲賀坂と云しよし里諺なり
○胸突坂　小川町より駿河台の方へ上る坂也
○埃坂　火消やしきの方へ登る坂也　本名光感寺坂
○唐犬坂　一昔瀧甫と云居やしき唐犬飼し故坂名に
○鈴木坂　鈴木氏の人多く地名付鈴木町二の字略して此所とす
○観音坂　此坂の並び昔普請観音寺やしきありし所
永井とこし

6年1月

新編江戸志巻之一終

新編江戸志巻之一終